

第4章 子どもの学力・習い事・進路

第1節 学力観と勉強観

第2節 進学希望段階

第3節 中学受験

青山学院大学教授 樋田 大二郎

第4節 塾や習い事

第5節 教育費

Benesse 教育研究開発センター主任研究員 沓澤 糸



第1節 学力観と勉強観

(1) 経年比較・学年段階別

もっとも選ばれた項目は「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」というふつうの生活志向の学力観。2002年からの変化では勉強重視と成績重視の学力観と勉強観が増加。

学力観・勉強観の経年比較

表4-1-1で母親の学力観・勉強観の推移をみると、2011年でもっとも多く選ばれた項目は「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」で、すべての年で5割弱で第1位である。「ふつう志向」は根強い。第2位は「子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい」が44.1%であった。母親は子どもの学習への関心が高い。

2002年と比べて上昇率が高い項目は2つある。「今は勉強することが一番大切だ」が2002年20.9%→2011年29.7%。「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」も2002年18.6%→2011年29.4%であり、それぞれ約10ポイント上昇している。前者は勉強重視、後者は成績重視を示す項目であり、近年の学力重視の傾向を反映している。

学年段階別と母親の教育方針別の変化

母親の学力観と勉強観のなかから次の4つの項目を取り出して学年段階別の変化を検討する。

- ふつうの生活志向＝「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」
- 楽しさ志向＝「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」
- 学習への関心＝「子どもの学習上の苦手

は親として正確に知っておきたい」

- 勉強志向＝「今は勉強することが一番大切だ」

図4-1-1で学年段階別にみると、ふつうの生活志向（小学校低学年51.6%→中3生42.2%）、楽しさ志向（同25.2%→16.0%）、学習への関心（同54.9%→32.1%）の3つは、学年が上がるにつれて徐々に下がり、中3生までに10ポイントから20ポイントの減少となっている。これに対して勉強志向（同20.9%→45.9%）は大きく上昇する。学年が上がるほど、勉強重視へと変化していることがわかる。

次に表4-1-2で、母親の教育方針ごとの差異をみる。「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」母親はそうでない母親よりもふつうの生活志向（55.0%対43.9%）と楽しさ志向（28.6%対15.5%）が強く、反対に勉強志向（26.6%対31.3%）、学習への関心（33.4%対49.6%）で弱くなっている。子どもの主体性尊重の教育方針とふつうの生活志向や楽しさ志向が結びついていることがわかる。

「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」と答えた母親はそうでない母親よりもふつうの生活志向（40.9%対56.9%）と楽しさ志向（14.7%対26.8%）が弱く、しかしながら勉強志向（33.9%対24.1%）と学習への関心（47.5%対39.7%）が強い。教育のことで世間に同調的な母親は勉強志向と学習へ

の関心が強い傾向がある。

最後に、「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」と答えた母親はそうでない母親と比べるとふつうの生活志向（40.4%対55.1%）と楽しさ志

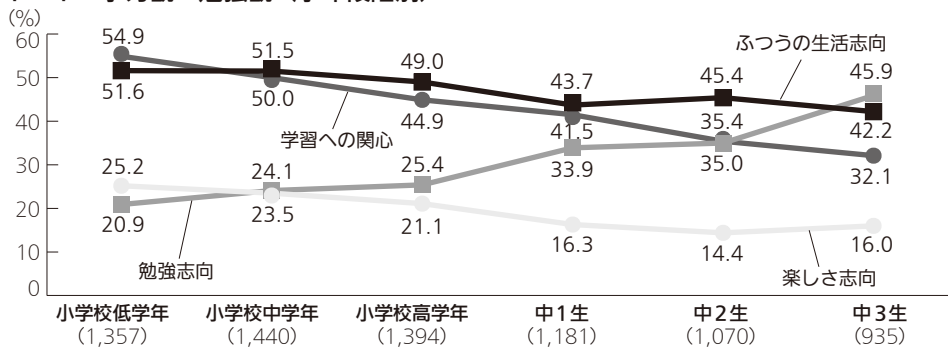
向（12.3%対27.7%）が弱く、勉強志向（35.1%対24.1%）と学習への関心（48.1%対40.4%）が強い。学校外教育がないと不安な母親は勉強志向と学習への関心が強い母親である。

表4-1-1 学力観・勉強観（経年比較）

	2002年 (6,085)	2007年 (6,770)	2011年 (7,519)
将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい	47.9	47.8	47.7
子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい	41.1	39.3	44.1
高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ	43.1	> 37.7	41.9
今は勉強することが一番大切だ	20.9	24.7	< 29.7
できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい	18.6	< 24.2	< 29.4
どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい	24.9	25.0	27.3
いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある	17.6	20.1	23.7
そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう	5.4	3.2	3.1

注1) 複数回答。 注2) <>は5ポイント以上差があることを示す。 注3) ()内はサンプル数。

図4-1-1 学力観・勉強観（学年段階別）



注1) 複数回答。 注2) ()内はサンプル数。

表4-1-2 学力観・勉強観（母親の教育方針別）

	勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている		子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている		子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である	
	あてはまる (2,482)	あてはまらない (4,953)	あてはまる (4,301)	あてはまらない (3,122)	あてはまる (3,774)	あてはまらない (3,652)
ふつうの生活志向=将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい	55.0	> 43.9	40.9	< 56.9	40.4	< 55.1
楽しさ志向=学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	28.6	> 15.5	14.7	< 26.8	12.3	< 27.7
勉強志向=今は勉強することが一番大切だ	26.6	< 31.3	33.9	> 24.1	35.1	> 24.1
学習への関心=子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい	33.4	< 49.6	47.5	> 39.7	48.1	> 40.4

注1) 複数回答。

注2) 「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」の各質問において、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した場合は「あてはまる」群、「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」と回答した場合は「あてはまらない」群とした。

注3) ()内はサンプル数。

(2) 母親の学歴別・生活のゆとり別

母親の学歴別と、生活のゆとり別に学力観と勉強観が大きく異なっている。また、母親の学力観や勉強観は子どもの勉強時間にも影響を与えている。

母親の学歴別にみた学力観・勉強観

母親の学歴別に学力観と勉強観が大きく異なる。図4-1-2で、大卒・短大卒の母親はそうでない母親よりもふつうの生活志向が30ポイント近く少なく、また、楽しさ志向も12ポイント近く少ない。大卒・短大卒の母親は子どもに対してふつうの生活志向や楽しさ志向の学力・勉強を求めない傾向にある。これに対して、勉強志向や学習への関心は大卒・短大卒の親のほうがやや高い。

生活のゆとり別にみた母親の学力観・勉強観

図4-1-3で、生活のゆとりと母親の学力観・勉強観の間に強い関連がみられた。とくに、ふつうの生活志向は「ゆとりがある」母親が31.5%であったのに対して、「ゆとりがない」母親は61.0%とおおよそ30ポイントもの差になっている。「ゆとりがない」母親ほど、「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」と考えている。楽しさ志向でも差異がみられる。「ゆとりがない」母親ほど、学校生活が楽しければ成績にはこだわらない。

これに対して、勉強志向や学習への関心は生活のゆとり別の差異は小さい。

母親の学力観・勉強観別にみた

子どもと過ごす時間

学力観・勉強観と子どもと過ごす時間に

関連があった。表4-1-3をみると、ふつうの生活志向のある母親は、ない母親よりも子どもと過ごす時間が16.4分長くなっている。また、楽しさ志向のある母親は、ない母親よりも子どもと過ごす時間が16.1分長くなっている。そして学習への関心がある母親は、ない母親よりも子どもと過ごす時間が23.0分長くなっている。

この表で興味深いことに、勉強志向のある母親は、ない母親よりも子どもと過ごす時間が9.2分短くなっている。

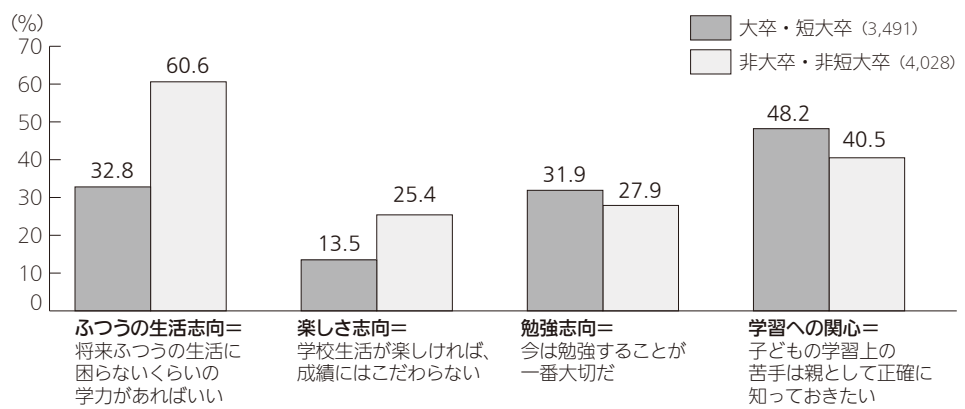
勉強時間

最後に、母親の学力観や勉強観が子どもの学習行動に与える影響を検討してみよう。同じ表4-1-3では、学習行動のなかから勉強時間に焦点を当てて母親の学力観・勉強観ごとの差異をみている。

ふつうの生活志向のある母親の子どもは、ない母親の子どもよりも勉強時間が14.8分短くなっている。また、楽しさ志向のある母親の子どもは、ない母親の子よりも勉強時間が19.0分短くなっている。ふつうの生活志向や楽しさ志向は子どもの学習時間を短くする効果がある。これに対して勉強志向のある母親の子どもは、ない母親の子どもよりも勉強時間が16.2分長くなっている。勉強志向は子どもの学習時間を長くする効果がある。

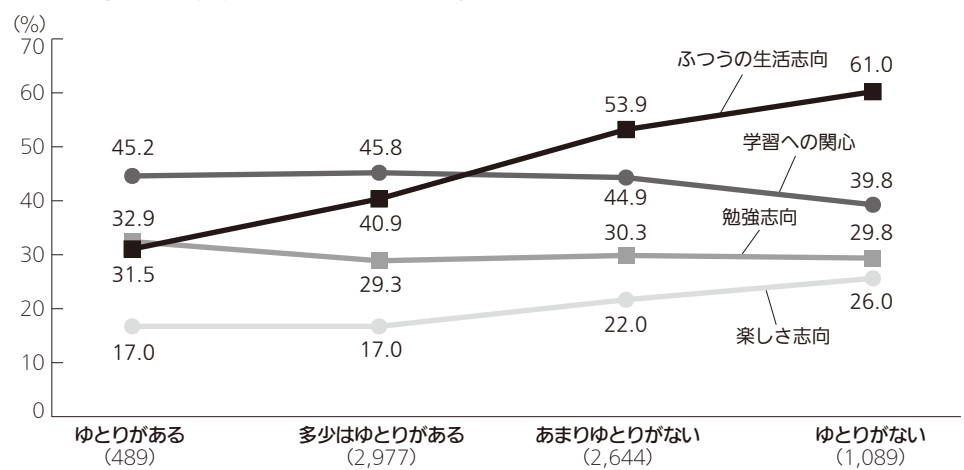
最後に、学習への関心がある母親の子どもと、ない母親の子どもとでは勉強時間にほとんど差はなかった。

図4-1-2 学力観・勉強観（母親の学歴別）



注1) 複数回答。
 注2) 母親の学歴について、「あなたは大学・短期大学を卒業している」を選択した人を「大卒・短大卒」、選択しなかった人を「非大卒・非短大卒」とした。
 注3) () 内はサンプル数。

図4-1-3 学力観・勉強観（生活のゆとり別）



注1) 複数回答。
 注2) 生活のゆとりについて、「あなたの生活には経済的にどの程度ゆとりがありますか」の質問に対する回答別に集計。
 注3) () 内はサンプル数。

表4-1-3 子どもと過ごす時間・子どもの勉強時間の平均（母親の学力観・勉強観別） (分)

学力観・勉強観	子どもと過ごす時間	子どもの勉強時間
ふつうの生活志向＝ 将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい	あてはまる (3,586)	367.3
	あてはまらない (3,933)	350.9
楽しさ志向＝ 学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	あてはまる (1,494)	371.6
	あてはまらない (6,025)	355.5
勉強志向＝ 今は勉強することが一番大切だ	あてはまる (2,236)	352.3
	あてはまらない (5,283)	361.5
学習への関心＝ 子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい	あてはまる (3,317)	371.5
	あてはまらない (4,202)	348.5

注1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。
 注2) 子どもと過ごす時間の平均は「ほとんどない」を0分、「1時間」を60分、「それ以上」を600分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。子どもの勉強時間の平均は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
 注3) () 内はサンプル数。

第2節 進学希望段階

四年制大学までの進学を希望する母親が徐々に増加している。また生活のゆとりや母親の学歴が四年制大学・大学院への進学期待に強く影響している。そして四年制大学・大学院への進学を期待する母親の子どもは勉強時間が長い。

進学希望段階の経年比較

図4-2-1で、「四年制大学まで」が徐々に増加している。2002年が51.2%、2007年が55.5%、2011年が58.3%と、2011年は2002年に比べて7.1ポイント増加している。

生活のゆとり別にみた進学希望段階

格差社会化がいわれてまだそれほど経っていないが、2011年調査では、生活のゆとりと進学希望段階に強い関連があることがわかった。「四年制大学まで」と「大学院まで」を合計した値をみたものが図4-2-2であるが、「ゆとりがない」母親は四年制大学以上への進学を希望する比率が46.8%と5割を切っているのに対して、「ゆとりがある」母親は77.5%とおよそ8割に至っている。

母親の学歴と進学希望段階

母親の学歴と進学希望段階にも強い関連があることがわかった。

図4-2-3は母親の学歴と進学希望段階の間に強い関連があることを示している。非大卒・非短大卒の母親は四年制大学以上への進学を期待する比率が46.6%と5割を切るのに対して、大卒・短大卒では79.2%と8割近い値になっている。

なお、紙面の制限で表にはしなかったが、

性別には男子のほうが、出生順位別には出生順位が早いほど進学期待が高かった。

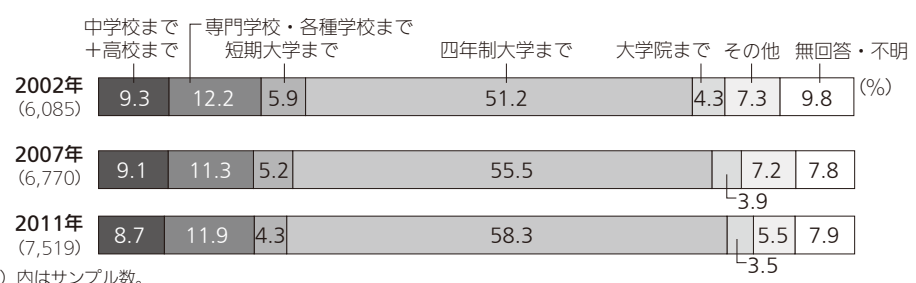
男子の母親 (3,806人)	71.1%
女子の母親 (3,692人)	52.0%
第1子 (3,978人)	64.5%
第2子 (2,726人)	60.9%
第3子 (689人)	52.9%
第4子 (83人)	37.3%

また学年段階別には、小学校低学年が61.8%→中学年が58.4%→高学年59.7%→中1生が62.7%→中2生が64.9%→中3生が65.8%であった。

進学希望段階と子どもの勉強時間

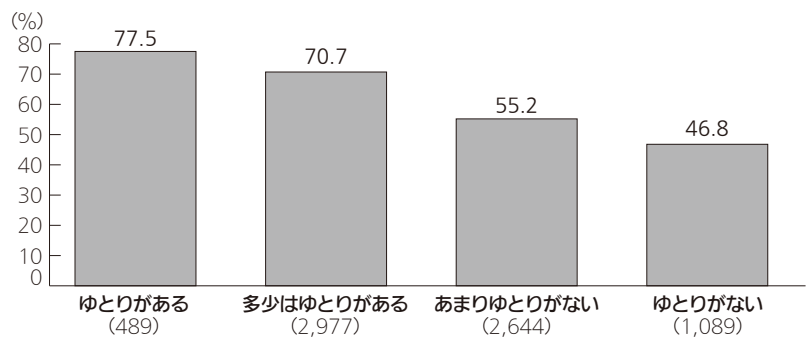
子どもにとっては母親の進学希望段階は、将来の進路の問題にとどまるものではない。それは子どもの現在の学習状況を左右する問題でもある。図4-2-4で、母親の進学希望段階と子どもの一泊あたりの平均勉強時間に強い相関がみられた。「中学校まで」+「高校まで」を希望している母親の子どもでは平均勉強時間は44.7分。「専門学校・各種学校まで」+「短期大学まで」が59.1分。これに対して、四年制大学以上への進学期待をみると、「四年制大学まで」が73.9分、「大学院まで」が87.6分と進学希望段階が上がるにつれて大幅に勉強時間が長くなる。四年制大学・大学院への進学が期待されている子どもは、子ども時代から長時間、学習している。

図4-2-1 進学希望段階（経年比較）



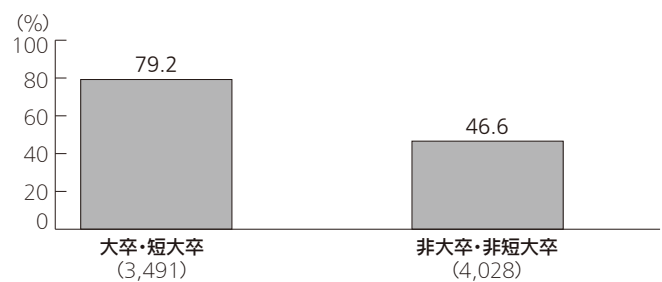
注) () 内はサンプル数。

図4-2-2 「四年制大学」以上の進学希望（生活のゆとり別）



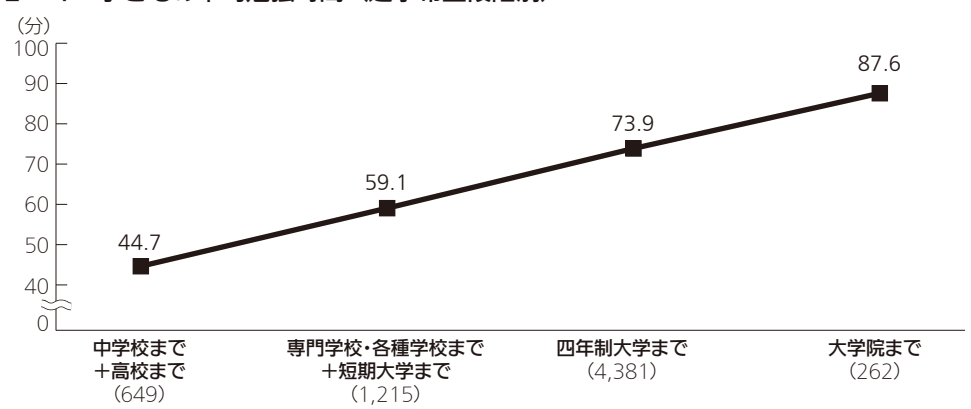
注1) 「四年制大学まで」+「大学院まで」の%。
 注2) 生活のゆとりについて、「あなたの生活には経済的にどの程度ゆとりがありますか」の質問に対する回答別に集計。
 注3) () 内はサンプル数。

図4-2-3 「四年制大学」以上の進学希望（母親の学歴別）



注1) 「四年制大学まで」+「大学院まで」の%。
 注2) 母親の学歴について、「あなたは大学・短期大学を卒業している」を選択した人を「大卒・短大卒」、選択しなかった人を「非大卒・非短大卒」とした。
 注3) () 内はサンプル数。

図4-2-4 子どもの平均勉強時間（進学希望段階別）



注1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。
 注2) 子どもの勉強時間の平均は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
 注3) () 内はサンプル数。

第3節 中学受験

2011年は中学受験希望率が減少した。受験希望の子どもは学習時間が顕著に長い。また生活のゆとりと受験希望率に強い正の相関があった。

中学受験の希望

中学受験希望率は年々高まる傾向にあったが、2007年の19.5%に対して、2011年には3.9ポイント下がって15.6%になった(表4-3-1)。経済不況や大震災の影響による一時的な傾向なのか、それとも公立学校改革の成果による長期的傾向なのか今後を見守りたい。

学年段階別の変化

学年段階別に中学受験希望の変化をみてみよう。表4-3-2で、小学校低学年では受験を「させる」が13.4%、「まだ決めていない」が33.7%、受験を「させない」が50.5%であった。比率にすると1対2.5対3.8になる。学年が上がるにつれて、「まだ決めていない」が減少し、小学校高学年では受験を「させる」が18.2%、「まだ決めていない」が11.5%、受験を「させない」が67.9%、比率は1対0.6対3.7になる。受験を「させる」と受験を「させない」に着目すると、低学年から高学年まで比率はほとんど変わっていない。

中学受験希望の有無別にみた勉強時間

中学受験希望の有無別に子どもの勉強時間を調べた結果が図4-3-1である。小学校低学年では受験を「させる」群が56.5分、「まだ決めていない」群が42.8分、受験を「させない」群が36.6分となっている。

学年が上がるほどその差は拡大して、高学年は受験を「させる」群が160.4分、「まだ決めていない」群が73.9分、受験を「させない」群が52.4分となる。受験を「させる」群と受験を「させない」群の勉強時間の平均の差は108.0分に拡大している。

毎月の教育費

中学受験の希望は生活のゆとりに強く影響されている。紙面の制約から表にはしなかったが、小学校高学年において生活のゆとりと中学受験希望率は次の関係にある。

ゆとりがある(98人)	41.8%
多少はゆとりがある(537人)	22.9%
あまりゆとりがない(501人)	11.6%
ゆとりがない(197人)	10.2%

格差社会化の反映とみることができる。

私立中学の授業料は高額であり、大きな出費になるが、今回の調査結果では、受験準備費用も高額であることが示されている。

図4-3-2は、小学校高学年について中学受験希望の有無別に毎月の教育費をみたものである(※教育費のなかには習い事なども含まれる)。中学受験をさせない家庭の教育費は5千円未満が23.6%、5千円～1万円未満が23.5%、1万円～1万5千円未満が19.9%で、これら1万5千円未満を合計すると67.0%、7割弱になる。これに対して、受験させる家庭では6万円以上が26.4%、5万円～6万円未満が16.9%、4万円～5万円未満が16.9%、これら4万円以上を合計すると60.2%、およそ6割にな

る。近年、私学通学者に対する授業料補助の動きがあるが、私学教育の機会を保証す

るためには、受験準備の段階でも経済的補助や学校の補助が必要である。

表4-3-1 中学受験の希望（経年比較 小学生） (%)

	2002年 (6,085)	2007年 (6,770)	2011年 (7,519)
させる	16.1	19.5	15.6
まだ決めていない	20.4	25.5	23.9
させない	60.2	53.5	58.0
無回答・不明	3.2	1.6	2.5

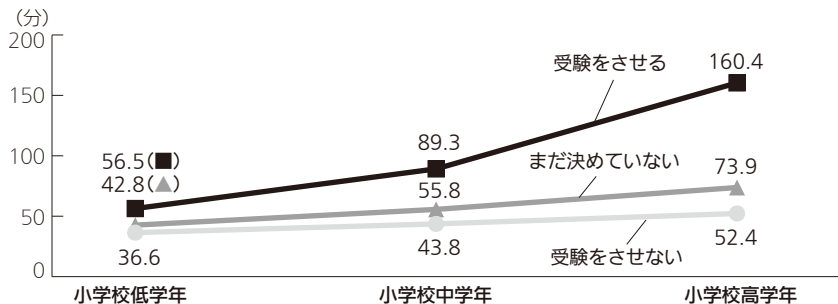
注1) 小学生のみ回答。
注2) () 内はサンプル数。

表4-3-2 中学受験の希望（学年段階別） (%)

	小学校低学年 (1,357)	小学校中学年 (1,440)	小学校高学年 (1,394)
させる	13.4	15.2	18.2
まだ決めていない	33.7	26.7	11.5
させない	50.5	55.4	67.9
無回答・不明	2.4	2.6	2.4

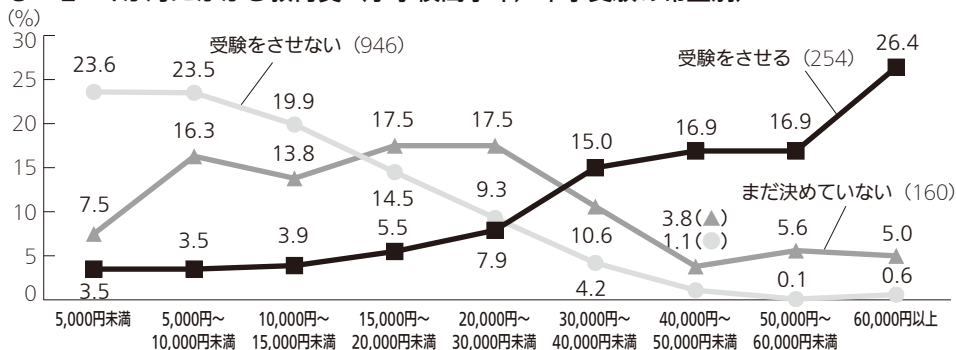
注1) 小学生のみ回答。
注2) () 内はサンプル数。

図4-3-1 子どもの平均勉強時間（学年段階別／中学受験の希望別）



注1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。
注2) 子どもの勉強時間の平均は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
注3) サンプル数は、小学校低学年（受験をさせる182人、受験をさせない685人、まだ決めていない457人）、小学校中学年（受験をさせる219人、受験をさせない798人、まだ決めていない385人）、小学校高学年（受験をさせる254人、受験をさせない946人、まだ決めていない160人）。

図4-3-2 1か月にかかる教育費（小学校高学年／中学受験の希望別）



注) () 内はサンプル数。

第4節 塾や習い事

(1) 今現在利用しているもの

塾や習い事は、小学生ではスポーツ系が多く、小3生ではおよそ3人に2人が利用している。一方で、学習系も中2生までは5割前後、中3生ではおよそ7割が利用している。経年比較でみると、全体に利用が増加し、とくにスポーツ系で顕著に増加していることがわかる。

学習指導要領の改訂で小・中学校ともに学校での授業時数、学習内容が増加しているなか、子どもたちの学校外における学習や活動はどのように変化しているのだろうか。ここでは、塾や習い事の現在の利用状況や、学習指導要領改訂前のこれまでの調査結果との経年比較からみてみたい。

小・中学生とも学習系の利用が多い

小・中学生あわせた全体では、表4-4-1で示したように「定期的に教材が届く通信教育」がもっとも多く26.5%と、およそ4人に1人が利用している。「スイミングスクール」は19.0%、「受験のための塾」は18.8%と、こちらもおよそ5人に1人が利用していることになる。

学校段階別にみると、小学生では「定期的に教材が届く通信教育」が31.9%ともっとも多く、これとほぼ同じ比率で「スイミングスクール」31.0%が続く。「地域のスポーツチーム」も21.7%と、およそ5人に1人が参加している。一方、中学生では「受験のための塾」が28.1%でもっとも多く、「補習塾」も13.2%と3番目に利用している比率が高い。重複しているケースもありうるが、単純に合計すると、中学生のうち、あわせて41.3%が現在何らかの塾に通っていることになる。

ことになる。ちなみに2番目に多かったのが「定期的に教材が届く通信教育」の19.9%で、塾の利用状況とあわせて、学習系に大きく重きが置かれていることがわかる。

また、性別（小1～中3生）でみると、前述の小学生の傾向は男子のそれと一致しているが、女子の場合は、「楽器」が24.2%と、およそ4人に1人が楽器を習っており、性別による違いがみられる。

中3生では約7割が学習系を利用している

それでは、このような状況を学年別にもう少し詳しくみてみよう。図4-4-1では、塾や習い事を、スポーツ系、学習系、芸術系の3群で示している。

スポーツ系は小3生で65.9%など、小学校低・中学年では6割前後が利用している状態が続くが、小6生では5割を切り、中学校入学以降は2割を下回っている。一方で学習系は小1生ですでに47.4%と約半数近くが利用しており、小2生以降も50%台を上下していくが、中3生で69.0%と全体の約7割に急激に増加する。芸術系は小学校段階では2～3割で推移するが、中学校段階では2割を割り込み、中3では11.6%まで減少する。

表4-4-1 現在利用している塾や習い事（全体、学校段階別、性別）

(%)

	全体 (7,519)	学校段階別		性別	
		小学生 (4,191)	中学生 (3,186)	男子 (3,806)	女子 (3,692)
スイミングスクール	② 19.0	② 31.0	3.7	③ 21.3	16.7
スポーツクラブ・体操教室	12.1	17.7	5.1	14.0	10.2
地域のスポーツチーム	15.4	③ 21.7	7.3	② 24.3	6.3
パレエ・リトミック	4.1	5.4	2.4	0.5	7.8
楽器	15.7	18.8	11.5	7.4	② 24.2
音楽教室	4.6	6.3	2.3	2.5	6.7
絵画教室や造形教室	2.0	2.9	0.8	1.7	2.4
習字	9.4	13.3	4.6	6.5	12.4
そろばん	3.5	5.5	1.1	3.4	3.7
児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル	2.6	3.1	1.8	2.6	2.5
英会話などの語学教室や個人レッスン	12.6	15.7	8.6	11.1	14.1
計算・書きとりなどのプリント教材教室	7.7	10.3	4.6	7.4	8.2
受験のための塾	③ 18.8	11.2	① 28.1	19.5	③ 18.1
補習塾	9.3	6.3	③ 13.2	9.6	9.0
家庭教師	1.7	0.7	3.0	1.6	1.8
受験が目的ではない幼児教室やプレイルーム	1.0	1.5	0.4	1.0	1.1
定期的に教材が届く通信教育	① 26.5	① 31.9	② 19.9	① 24.7	① 28.4
その他	7.1	9.0	4.7	6.5	7.8

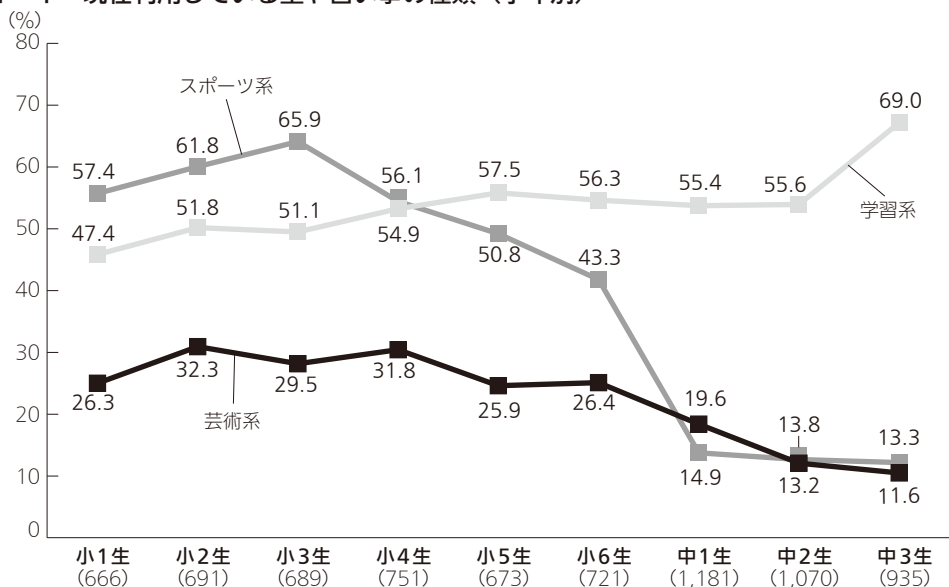
注1) 複数回答。

注2) 学校以外の塾や習い事などを利用したことがないと回答した母親を含めた、すべての母親の回答を母数としている。

注3) それぞれの上位3位までを丸数字で示した。

注4) () 内はサンプル数。

図4-4-1 現在利用している塾や習い事の種類（学年別）



注1) 複数回答。

注2) 学校以外の塾や習い事などを利用したことがないと回答した母親を含めた、すべての母親の回答を母数としている。

注3) 「スポーツ系」は「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム」から最低1つ、「芸術系」は「パレエ・リトミック」「楽器」「音楽教室」「絵画教室や造形教室」から最低1つ、「学習系」は「定期的に教材が届く通信教育」「受験のための塾」「補習塾」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「家庭教師」から最低1つを選んだ%。

注4) () 内はサンプル数。

すべてのタイプの利用が増加している

次に、学校段階別に初回調査であった1998年からの経年変化をみてみたい(図4-4-2)。

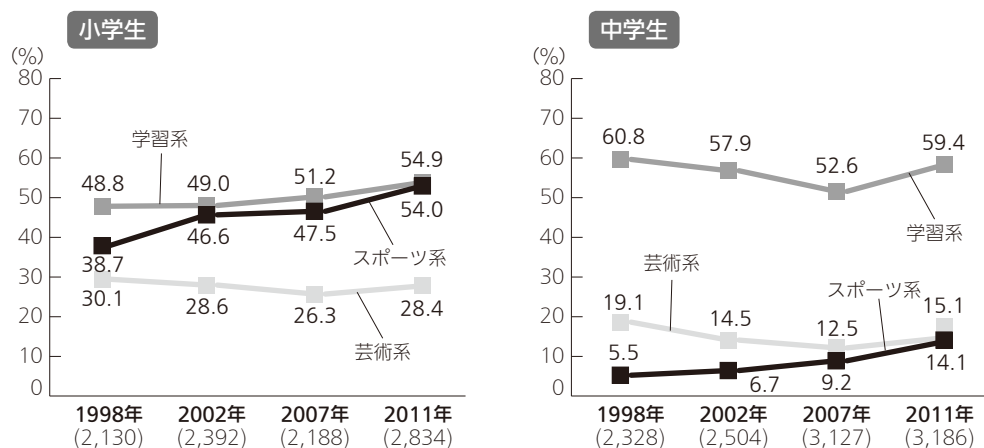
小学生(小3~小6生)では、1998年から今回まで、学習系がもっとも多く、次いでスポーツ系、芸術系という順位は変わっていない。しかし、学習系が1998年の48.8%から2011年で54.9%と小幅な増加であったのに対し、スポーツ系は同じく38.7%から54.0%と大きく増加しており、2011年では学習系とほぼ拮抗している。芸術系は2007年まで微減傾向だったが、2011年では微増している。

次に中学生では、学習系は1998年から

2007年までは減少傾向にあったが、2011年には1998年とほぼ同じ比率にまで回復している。また、スポーツ系も小学生の傾向と同様に1998年の5.5%から増加しており、2011年では14.1%と、約2.5倍になっている。芸術系も小学生の傾向と同じく、2007年までの微減傾向から回復している。

ここまで1998年からの経年変化でみてきたように、小・中学生ともにスポーツ系の利用が大きく増加しており、学習系・芸術系も、とくに前回の2007年と比較するとその増加・回復傾向が認められる。つまり、2011年では、学校外でのすべてのタイプの塾や習い事の利用が増加していることになる。

図4-4-2 現在利用している塾や習い事の種類の経年比較(学校段階別)



注1) 複数回答。

注2) 学校以外の塾や習い事などを利用したことがないと回答した母親を含めた、すべての母親の回答を母数としている。

注3) 「スポーツ系」は「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム」から最低1つ、「芸術系」は「バレエ・リトミック」「楽器」「音楽教室」「絵画教室や造形教室」から最低1つ、「学習系」は「定期的に教材が届く通信教育」「受験のための塾」「補習塾」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「家庭教師」から最低1つを選んだ%。

注4) 「小学生」は小3~小6生、「中学生」は中1~中3生の数値。

注5) ()内はサンプル数。

(2) 今までに経験したものの

今までに経験したことがある塾や習い事は、小学生では学年段階で大きな変化はなく「スイミングスクール」などスポーツ系が上位に並ぶ。その一方、中学生、とくに中3生では「受験のための塾」がもっとも多いなど、学習系の利用者が受験準備を機に広がる。

次に、「現在」ではなく「今までに」利用した経験のある塾や習い事についてみてみたい。

中3生で学習系の経験率が顕著に高まる

「今までに」利用したことがある塾や習い事について回答してもらったところ、全体の94.3%がいずれかの塾や習い事を選択している。学校段階別・性別などでみても大きな差はみられず、つまり、ほぼすべての子どもが早い年齢段階から塾や習い事などの学校外での活動を経験していることになる。

次に、学年段階別での変化について、それぞれの段階で経験率の高い上位5位を取り出した表4-4-2でみてみたい。

まず、小学校段階では、低・中・高学年

でほとんど順位は変わらず、「スイミングスクール」が1位、「定期的に教材が届く通信教育」が2位、「スポーツクラブ・体操教室」が3位である。4位は、低学年では「英会話などの語学教室や個人レッスン」だが、中学年になると「地域のスポーツチーム」がこれにとってかわる。小学校中学年段階から「地域のスポーツチーム」が学校外での活動として加わってきている状況が読み取れる。

中学生では、とくに中3生で「受験のための塾」「定期的に教材が届く通信教育」などの学習系の経験率が、スポーツ系のそれを上回って顕著に増える。ここまで、学習系の塾や習い事を経験しなかった層が、高校受験を控えて学習系の塾や習い事を始めることが読み取れる。

表4-4-2 今までに利用したことがある塾や習い事（学年段階別）

(%)

	小学校低学年 (1,357)	小学校中学年 (1,440)	小学校高学年 (1,394)	中1生 (1,181)	中2生 (1,070)	中3生 (935)
1位	スイミングスクール 51.6	スイミングスクール 57.4	スイミングスクール 56.2	定期的に教材が届く通信教育 56.3	定期的に教材が届く通信教育 56.9	受験のための塾 66.5
2位	定期的に教材が届く通信教育 50.7	定期的に教材が届く通信教育 51.7	定期的に教材が届く通信教育 52.4	スイミングスクール 55.9	スイミングスクール 53.5	定期的に教材が届く通信教育 57.2
3位	スポーツクラブ・体操教室 36.4	スポーツクラブ・体操教室 35.2	スポーツクラブ・体操教室 35.7	受験のための塾 40.7	受験のための塾 45.8	スイミングスクール 52.2
4位	英会話などの語学教室や個人レッスン 23.0	地域のスポーツチーム 28.7	地域のスポーツチーム 31.2	地域のスポーツチーム 32.6	地域のスポーツチーム 33.5	地域のスポーツチーム 31.8
5位	楽器 19.5	楽器 25.6	英会話などの語学教室や個人レッスン 29.9	スポーツクラブ・体操教室 31.2	英会話などの語学教室や個人レッスン 29.6	スポーツクラブ・体操教室 30.8

注1) 複数回答。

注2) ()内はサンプル数。

第5節 教育費

1 か月にかかる教育費は、2007年よりも微減している。これは小5・6生の中学受験希望がある層の教育費が減少しているためで、他の学年、中学受験しない小5・6生では大きな変化はない。

前節でみたように、子どもたちの学校外活動である塾や習い事は全体に増加傾向がみられたが、教育費もこれにともなって増加しているのだろうか。1998年からの経年比較より、その変化をみてみたい。

2007年調査からわずかに減少している

ここまで4回分の本調査の結果から教育費の推移をみてみよう。図4-5-1で示すように、今回2011年の調査での平均額は18,856円だった。教育費は2007年に、それまでよりも増加がみられたが、今回はその2007年よりも500円強減少している。

小5・6生の中学受験層の教育費が減少

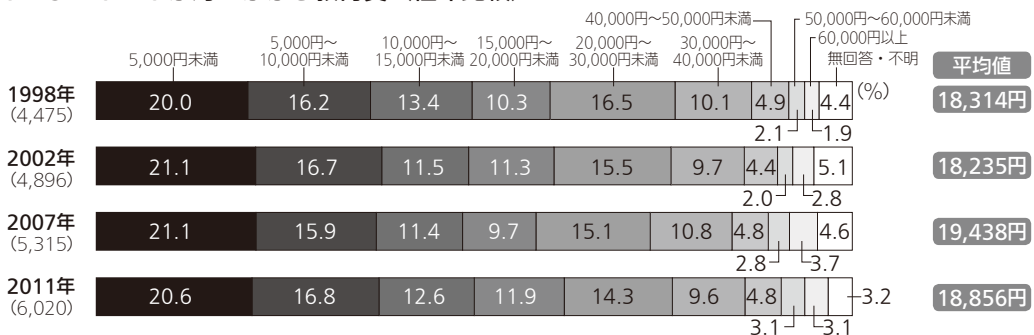
次に、1か月にかかる教育費を2007年との対比で、学年別にみてみよう(図4-5-2)。学年別の教育費の推移のかたちは、

2007年も今回も同じ傾向で、教育費の平均額もほとんどの学年で前回とほぼ同じかやや増加しているが、小5生で2007年に比べ1,711円減、同じく小6生で3,161円減と大きく減少していることがわかる。

この点について、その背景をさらに詳しくみたのが図4-5-3である。これは、本調査が首都圏の学校を対象として行っていること、さらに高学年では中学受験のための学習をしている子どもが一定数いることから、中学受験希望の有無別に1か月にかかる教育費(小5・6生のみ)をみたものである。

中学受験を「させる」と回答した群では、2007年調査と比較して教育費が3,670円も減少している。一方で、「させない」と回答した群では、832円増加している。このことから、教育費の減少は中学受験のための教育費の変化(減少)が大きな要因として全体の平均を押し下げたとと思われる。

図4-5-1 1か月にかかる教育費(経年比較)



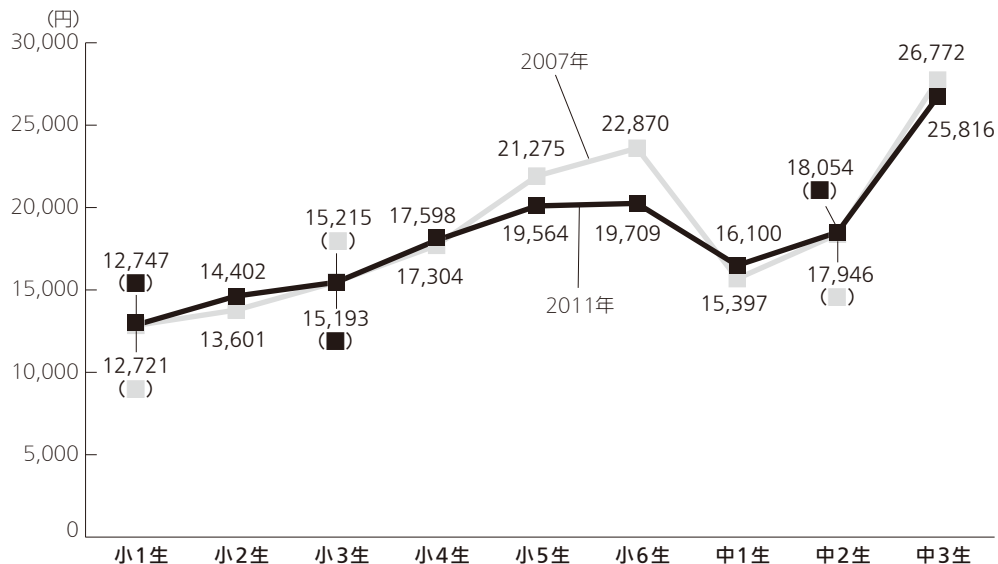
注1) 小3～中3生の数値。

注2) 「今までに学校以外の塾や習い事、スポーツクラブ、通信教育・教材などを利用したことがありますか」という質問に対して「いいえ」と回答したケースについては、「5,000円未満」とした。

注3) 1人あたりの平均教育費は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「60,000円以上」を65,000円のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

注4) ()内はサンプル数。

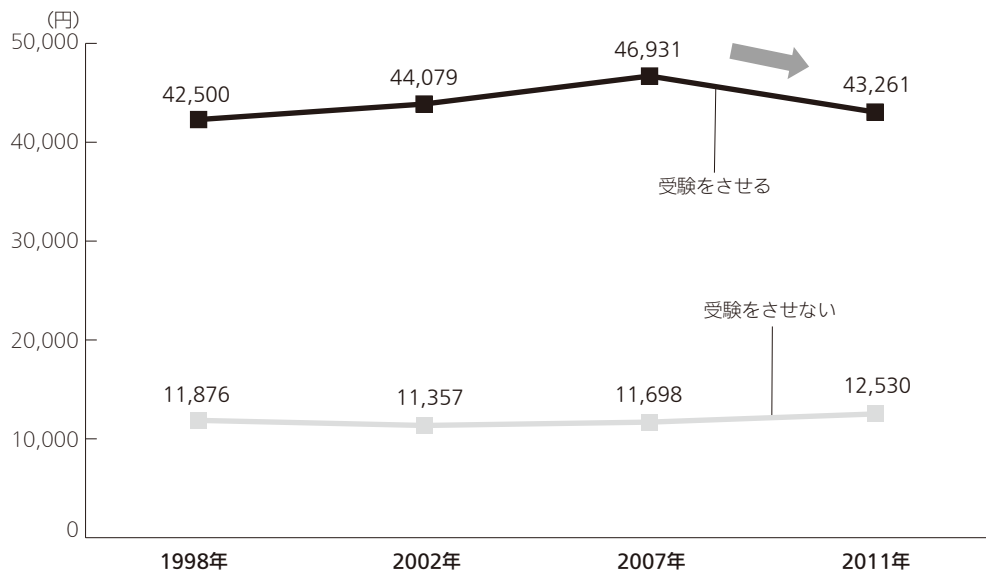
図4-5-2 1か月にかかる教育費の平均（経年比較 学年別）



注1) 1人あたりの平均教育費の算出方法は図4-5-1と同様。

注2) サンプル数は、2007年（小1生728人、小2生709人、小3生659人、小4生580人、小5生475人、小6生474人、中1生1,094人、中2生1,000人、中3生1,033人）、2011年（小1生666人、小2生691人、小3生689人、小4生751人、小5生673人、小6生721人、中1生1,181人、中2生1,070人、中3生935人）。

図4-5-3 1か月にかかる教育費の平均（経年比較 小5・6生/中学受験の希望別）



注1) 1人あたりの平均教育費の算出方法は図4-5-1と同様。

注2) 「お子様に中学受験をさせますか」の質問に対する回答別に集計。「まだ決めていない」と回答した群については省略した。

注3) サンプル数は、1998年（受験をさせる199人、受験をさせない843人）、2002年（受験をさせる235人、受験をさせない805人）、2007年（受験をさせる239人、受験をさせない577人）、2011年（受験をさせる254人、受験をさせない946人）。